

～出エジプト記を読んで感じること～ (13) モーセの母 ヨケベド

エジプトのファラオは奴隷としていたヘブライ人が増えすぎる、強すぎるということで脅威を感じ、「男児が出生すれば、ナイル川にほうり込め」と命令を出していました。ファラオは一度戦争が起これば、虐待しているヘブライ人が敵方に付くかもしれないと恐れて、これ以上の人口増加を殺人という形で抑えようと考えたのですが、恐ろしいことです。この時代に生まれたのがモーセです。



<モーセの母> Simeon Solomon, 1860

密かになされたことかもしれません。

モーセは旧約聖書中の最大の人物と見なされています。

「アムラムは叔母ヨケベドを妻に迎えた。彼女の産んだ子がアロンとモーセである。アムラムの生涯は137年であった(出エジプト6:20)」とありますように、母はヨケベドという名前の女性です。

ファラオの命令にモーセの母ヨケベドは従うことはできませんでした。嬰兒殺害といえ、イエス・キリストの誕生に際し、ヘロデ大王がベツレヘム周辺の2歳以下の男児を皆殺しにしたという事件をすぐに思い起こします。

「主はこう言われる。ラマで声が聞こえる／苦悩に満ちて嘆き、泣く声が。ラケルが息子たちのゆえに泣いている。彼女は慰めを拒む／息子たちはもういないのだから。(エレミヤ31:15)」

と嘆きの記録がありますが、これはバビロン捕囚の際の虐殺を指しているようです。ファラオによる嬰兒殺害の歴史的な記録がないを見ると、どの程度の事件だったのかわかり

いずれにしてもファラオもヘロデ大王も、自らの安全を、無力な赤ちゃんを殺すことによって、図ろうとしたのです。これはただ単に、権力者による虐殺というだけですむでしょうか。昔から、日本でも、望まない出産では、間引いたり、中絶したりしています。現在では出生前診断で異常があれば中絶して、自らの安全、安心のために、子どもを殺害しているのです。あらゆる弱い者に対する人間の恐ろしい、忌まわしい罪といえるでしょう。

ヨケベドは子どもを産み、三か月の間、隠して育てました。どうしても生かしたかったのです。隠せなくなった時、わずかな希望にかけて、防水したパピルスの籠に子どもを寝かせて、ナイル河畔の葦の茂みの中に入れました。そして、遠くに姉娘を見張りにつけました。幸いなことにそこへファラオの王女が水浴びに出てきて、子どもを見つけたのです。彼女は泣いている子どもを取りだすと、すぐに「これは、きっと、ヘブライ人の子です」と言いました。王女もファラオの命令を知っていたのでしょう。その時、隠れていた姉娘が飛び出して、「この子に乳を飲ませるヘブライ人の乳母を呼んで参りましょうか」と申し出ました。王女は非常に不憫に思って、「そうしておくれ」と即座に承諾し、さらに、「この子を連れて行って、私に代わって乳を飲ませておやり。手当は私が出しますから」と言ったのです。姉娘はすぐに乳母として、母を呼びました。ヨケベドは我が子を引き取って乳を飲ませ、乳離れするまで手元に置いてから、王女の元に返したとあります。育てることのできない母ならば、養子としてでも育てていってくれば、大きな安心です。子どもの命を守るためには、自らの犠牲をもちとわぬ決断が必要であり、ヨケベドがその決断に賭けた時、神が不思議な手を差し伸べてくれたのです。